

愛犬チロ

佐川毅彦

久しぶりに永山先生のところに暑中見舞いにいった。

庭では中型犬がアルミの器で食事をしている。

先生と私は、その犬を見ていた。犬の名は一応チロというそうだ。

その時先生から聞いたチロにまつわる話を書く。

今年一月末に息子の圭吾のために一部屋増築する事になり、その金城工務店に頼んだのだが、その時作業員が資材を運ぶために外の門を開けたままにしたのよ。そしたら君、チロのヤツ外に出てしまったんだ。なにしろ犬の事だ。行く先がさっぱり見当

がつかん。三日たっても帰ってこん。家内が工務店の社長に文句を言ったら一日仕事を休みにして店の者総出で町中を探し回ってくれたんだ。しかし見つけることはできなかった。

その時ワシは思いついたんだ。那覇のはずれの方になんていうたか、ほれのら犬や捨て犬などを置いとく野犬狩りの留置所あるだろ。処分されたら大変だとすぐに圭吾に行ってもらった。そしたら君、圭吾がチロを見つけて帰ってきた。家族大喜びで迎えたんだが、ところがだね、家内も娘もこの犬じゃないというだ。似てはいるがどこか違うんだな。別人じゃなく別犬だな。こ

れを我には別犬逮捕という。

第一発見者の圭吾がいうにはオリの中から自分を見つめる目を見た時、まぢがいなくチロだとすぐわかった。目が私がチロだとうつつたえていたというだよ。

犬も死ぬか生きるかの時だから必死だったんだろ。

まんまと圭吾のヤツだまされた。ワシは今でもこれはチロじゃないと思っている。コイツ圭吾と会わなければ今頃処分されて生きていなかっただろうよ。犬にとつて圭吾は命の恩人というワケよ。



夢の話



志^し村^{むら}有^{くに}弘^{ひろ}

（文芸評論家・
相模女子大学名誉教授）

私は、そのとき古本屋にいた。小説『妹背牛』という本を手にしていた。表紙に厳寒らしく、すっぱりと頭を包む黒い帽子を被った男の顔が大きく描かれている。何か叫んでいるのか口を開けている。本来は口の部分を釘で止めるはずなのに、はずしているらしい。古本屋にはゼミの学生が店員のそばにいて、卒業論文のアドバイスをしてほしいと眼で合図をしている。どうし

て古本屋に学生がいるのかと、不思議に思う。小説の定価は三万九十六円と書かれている。奥付を見たわけではないが、表紙や装丁から見ると、昭和十八年ころに出された本と思われる。買いたい気がする。それにしても三万九十六円という値段は高すぎる。たとえ、購入したとしても、この作者について調べおおせることができるだろうか。ここは購入しないで、誰か他の人が購

入して調査・研究するのを待つ方がいい、と考えた。

右に書いたことは、最近見た夢である。カラーの夢ではなかった。モノクロである。小説『妹背牛』という書物があるのかどうか、インターネットで眺めてみたが、やはり夢の中の本であるらしい。九十六円という半端な値段が付いているのも夢だからであろう。黒い帽子を被った男の絵は、中山正男の『馬喰一代』の表紙に描かれていたものが私の意識の中にあつたものか、あるいは映画「馬喰一代」に出演した俳優のイメージが微かに残っていたものか。

私の祖先は白石藩主の片倉小十郎に仕えていた。時代が明治となり、祖父は次男であつたことから、白石から北海道の札幌に渡った。そのあと、父も祖父を慕って札幌に向いた。こうして私は北海道の深川市に生まれた。少年のころ、冬、馬糞で荷物を運ぶ日通勤めの人が防寒のため、顔を包む黒い

帽子を被っていたのを記憶する。

深川の隣の町が妹背牛である。以前、NHKの朝の連続テレビ小説「すずらん」が放送されたが、主要な舞台の恵比島へは深川から列車で行くことができる。深川はそれほど人口も多くない。それでも函館本線では札幌から順に岩見沢、美唄、砂川、滝川、深川、旭川と特急が停車する。深川は留萌方面に向かう留萌線の始発駅であり、以前は名寄へ向かう深名線の始発駅でもあった（深名線は今も廃止され、バスが走っている）。「すずらん」に出演した富士真奈美さん（女優・俳人）から「これから氷点下二十五度になる厳寒の地へ撮影で出かけます」という便りをいただいたことを思い出す。

私は高校を卒業するまで深川にいた。今も深川や旭川には高校時代の友人が何人か住んでいる。彼等と旧交を暖めるたびに、故郷に土着している彼等の底力を羨ましいと思う。私は夢を求めて故郷を離れたわけではない。異郷に流れ行くしか能がなかったのである。

ところで、昔は、夢を買うというところがあつた。ひきのまきひと（吉備真備かという）は夢解の女（見た夢の意味を解き明かす女）から他人の見た吉夢を買って大臣にまで出世したという。説話集『宇治拾遺物語』に見える話である。

中世女性の日記『とはすがたり』には七十個の「夢」の文字が記されており、睡眠中の夢も示されるが、時には夢がストーリーを展開させるうえで伏線となったりしている。『更級日記』の作者も夢多き人であり、『浜松中納言物語』は夢のお告げがストーリー展開の重要な役割を果たしている。当然、昔は、夢が現実体験の一つであると認識されていた。ある人が死に、その人が誰かの夢の中で極楽に生まれたことを告げたりすると、その人は極楽世界に生まれ変わることができたのだと信じられた。

とかく縁起担ぎの日本人は、元旦に見る初夢を重く受け止める。変な夢を見たりでもしたら、正月早々縁起が悪

い、と思う。もつとも、今、夢を重視する人はほとんどいなくなった。作家の島尾敏雄は、夢もやはり自分の体験なのだから、捨て去るのは惜しいと夢の記録を書き続け、生前、夢日記を二冊出した。漫画家のつげ義春も島尾に勧められて、やはり夢日記の本を出した。島尾は「つげの漫画は、短編小説だ」と私に話していたが、島尾の小説もつげの漫画も超現実主義的な色彩が濃厚である。それは彼等の夢に対する関心と無関係ではないように思う。

話がジグザグしたが、私は加藤愛夫、木野工、寒川光太郎、武田隆子、中津川俊六、中戸川吉二、西野辰吉など北海道ゆかりの作家の作品をほそぼそと集めてきた。だからといって、彼等の文学的価値をまともに論じたわけではない。小説『妹背牛』の夢は、故郷の文学者に対する自分の負い目が夢となって現われたものであつたらうか。それとも単に望郷の念が原因となつたものであろうか。

型絵染版画　メードリング市のミュージアム

オーストリアのウィーンに程近いメードリングはウィーンの森の一角にあり、十二C頃の静かな町で、ベートーベンがミサ・ソレムス作曲した館も残る。その一角に市のミュージアムがある。

明治時代にオーストリアハングリー帝国の貴族のクーデンホーフ・カレルギーが代理大使として日本へ赴任した。公邸に小間使いに上がっていた油問屋

の光子がクーデンホーフに見初められて結婚した。後に夫の祖国オーストリアハングリー帝国に渡った。夫は早くになくなり、三十路を過ぎて一人になった光子は異国の地で七人の子供を育てた。晩年を過ごしたメードリングで末娘オルガにみとられて、一度も日本に帰ることなく最期をとげた。

二〇〇八年にメードリング市のミュージアムに「パン・ヨーロッパ日本庭園」が造られた。それは日本人の造園家の手によって完成されたものだ。光子の史跡もミュージアムに展示されている。

光子の自慢の息子であった次男のリヒャルト・クーデンホーフは現在のEUの先駆けとなった「パン・ヨーロッパ」の提唱者であった。

さかもと　ふ　さ

(型絵染版画家、エディター
イラストレーター)



型絵染版画 オーストリアで実った「テンノーワイン」の話

さかもと ふ さ

（型絵染版画家、エディター
イラストレーター）



オーストリアの東部アイゼンシュタットで代々ワイナリーを営むルドルフ・カイザーさんと息子のクルトさん、ルドルフの父、シュテファンさんは、一九三八年に母国のキリスト教団から岐阜県多治見市の多治見修道院に派遣された。多治見修道院でブドウ栽培を任されて、ミサ用のワインを作っていた。

来日後、ブドウ栽培は軌道に乗り、良質のワインが作られた。

太平洋戦争が始まり、ワインの輸入は困難になり、多治見修道院のワインは全国の修道院に送られた。当時宮内省からも大量の注文を受けた。天皇誕生日の祝日に、ドイツ、イタリア等の同盟国の外交官らにも提供された。シュテファン氏は二十五年いた日本を後にして、母国に帰った。日本から持ち帰ったブドウも八十年代迄、栽培をしていた。シュテファンさんの死後、父の思い出として、その年にとれた一番いいワインに、「テンノーワイン」と命名される。

一家の姓、カイザーも「皇帝」天皇を意味し、これも何かの縁とルドルフさんはいう。

「生きる緊張」

今は、仕事に就けず途方に暮れている若い人がかなりいると、マスコミが伝えている。

人生の旅立ちとも言うべき時でのその状況は、辛いものがあるうと思われ。しかし、人間は、回顧的に自らの人生を望見する年齢になってみると、過去の出来事とか苦悶の日々それぞれに、何がしかの意味があったと思えて来るから、不思議でもある。

ところで、小林秀雄の著作は、その紙背に常に一つの発想が息をこらしている感じがして、その感触が一部の人を魅了して止まない。

以下は、その『政治と文学』にある。「ドストエフスキイの考へによれば『オネーギン』は寧ろ『タチヤナ』と題すべき作で、オネーギンといふ教養ある



複雑な人物より、タチヤナといふ単純な田舎娘の方が、実は余程高級な本当の意味で聡明な人間だといふ洞察に、プーシキンの天才があるといふ。」

それなのに既成の発想にいつい流れ易い世間の目を、このように批判するところが続く。「問題は、多くの批評家が論じた様な恋愛と道徳の相剋などにはないのだ、と言ふのです。タチヤナは（中略）不幸によつて錬磨された毅然たる人間になってゐるのである。」

決定的な言葉は、その先にある。「オネーギンの不幸は、実は空想家でありながら、自分はリアリストと信じてゐるところにある。オネーギンは、タチヤナといふ一個の人間を決して見た事はなかった。（中略）この不幸なパロデイが、プーシキンによつて看破さ

れてゐる。ドストエフスキイの言葉通りではありませぬが、以上が、彼の意見です。」

実はかなりの年月、この数行を軽い気持ちで通過していた。リアリストと空想家の峻別に神経を欠いていた、と言えるわけだ。

翻つて、立派な理想とか信念を心に秘めることは、若く、純粋な人によく見られることだ。一般的には、このことが否定的に見られることはほとんどない。いわば疑念をさし挟む余地のない美名と目される。

しかし、人間は高尚な理想をかかげ、あるいは快い空想に流れる時、ついつい足下の現実を失念することも事実だ。「タチヤナという一個の人間を見た事がなかった」というひとことに、世の

志し
村むら
栄よし
守もり

（評論家）

理想家、空想家の嵌り易い陥穽が具体的に
如何かか如美ではなからうか。

だから、生れてこのかた辛辣な試験
とは無縁のごく一部の人を除いた、普
通の人なら、思い当る過去の苦い経験
の一つや二つはあろうかと思われる。

また、『故郷を失った文学』には、ほ
ぼ内容を一にするのがこんな姿をし
て出て来る。

「先日、(中略)ドストエフスキイの
『未成年』を再読し、以前読んだ時に
は考へてもみなかった色々な事に気づ
いたが、とりわけ作者が『未成年』と
題をつけた意味がはっきり解った様に
思った。」

その先に、その「はつきり解った」
ことがこう出て来る。

「自然主義の昔から、社会の秩序無秩
序の問題が今日くらい明瞭に表れて来
た事はなかった。(中略)一口に言へば
青年的性格が社会の表面に現れて、円
熟した精神の価値が低下してみえて来
る、言へるであらう。」

さらにこのことの別言とも言えそう
なジイドからの引用を同時に勘案する
と、小林が問題視するところが鮮明化

し、その衷心がいよいよ判然として来
る。(『手帖』から)。

「〔作品は真面目であればある程弱り易
い。モリエールもセルヴァンテスもパ
スカルでさへも決して真面目じゃない、
沈着なのだ。〕」

この「沈着」という言葉は、小林自
身の文章中にこう出て来る場所があ
る。「冷静ではない、沈着なのだ」と。

まったく捉えどころのない言葉のよう
だが、次第に小林がこの言葉に託す思
いが以心伝心に伝わって来る。

再び翻って、私達には、自らの不幸
のそもその素因とは・・・と手探り
の末に、ハッと何かが訪れる幸せな瞬
間がある。それがこの「沈着」に係
わり、あるいは示唆するものであつて
も不思議ではない。

とにかく理想図を脳裏に描き易い若
い時には、「青年的性格が社会の表面に
現れて、円熟した精神の価値が低下」
する、一種の顛倒に近い状況に無頓着
なものだ。

しかし、当然のことながら、人生に
は変化の時がいつかはやって来る。中
でも長い間、社会の各分野で仕事に従

事する人たちの姿を平凡かつ当り前の
ことと見ていたが、突如、その風景が、
小林のベルクソンに触れた文章にあつ
た「生きる緊張」という言葉と重なり
合つて、まったく別様に見える瞬間は、
その最たるものか。

また、それを確認する内心の動揺は
半端ではないが、それはつまり、外側
に「生きる緊張」を見届けることは「円
熟」の一つの証かも知れず、自らの人
生を変える第一歩か、の予感が始動す
るからだろうか。

小林『罪と罰』について『のきわめ
て特徴的なフレーズ、ここは引用した
覚えがある。

「さうだ、見る事が必要なのである。
だが、評家は考へてしまふ」(傍点)小
林)。

人生観の「観」という言葉の存在か
らも、「見る」という行為が人間の自己
形成と係わるといふ見解は、古からの
叡智かも知れず、小林の言葉が突出し
たパラドックスというわけでもなさそ
うだ。(了)

ハートかずら

中西美子



最近ちまたでは、かわいいリボンがはやっています。若い子のバック、靴、あらゆるものに必要以上に大きなリボンがくっついています。このあいだまでは、ハート柄が主流だったかと思いますが、女の子の好きな「かわいい」物の代表は、ハートにリボンにお星さまとお花これらをいろいろ組み合わせる小物にデコって楽しんでいます。さらさらにしたりやりすぎだろうと思うくらい盛りまくっています。シンブルイズベストという感覚は、どこにいったんだろう。それはそれとして、ハート型は、女性にとって魅力的な形です。そんなハート型の葉のツタをみつけて喜んで鉢を買って育てていると変な花が咲きました。面白い形なので描いてみました。

死なす、殺す……



桐原良光

(文芸ジャーナリスト)

「死なす」の「殺す」という言いかにも物騒な話だが、心配ご無用。壁土作りの話だ。

作家、幸田文^{あや}(一九〇四〜一九九〇)のエッセイ集「季節のかたみ」を読み返していたら、作中「壁つち」の章に壁職人の話があった。「死なす」「殺す」は、壁土を腐らせることなのだそうだ。

いい壁を作るためには、土を二年も三年も腐らせてから使わなくてはならないのだという。もちろんこれは、ぼくなどが住んでいる現代のコンクリート長屋の話ではない。寺や城、武家屋敷

といったいわゆる「和」の建物や外壁の話であろう。

「なにしろ土は生きているのだから、殺さなければ思うようには使えない。それに土は性根の強いものだから、死なすには相当ほねを折らなければならぬのだ」と作家は職人の言葉を伝える。

「土を死なすには、用量の土に、適当な水を加えて、捏ねる。土はやわらかくなる。それを縁高、中くぼみに形づける。窪みの中に水をたたえる、縁高だから、水が外へ流れだしてしまうこ

とはない。そのまま放置しておく。四季がめぐる。春の蒸すような暖気、つゆの長雨、夏のひでり、秋の冷え、厳冬の凍土と、土はいためつけられて、だんだんと腐っていく。しかも、より万遍なく腐らせるために、この間に何度も捏ねなおされる。人の足で、踏みこねるのだという。つい思わず、その作業を想像しておかしくなった。子供のどろんこ遊びとおなじで、なんと汚らしく、そして滑稽である」

これが「鼻のもげそうな悪臭」の中での作業なのだということではないか。夏場であったのだろう。ぼくは、左官屋や大工、植木屋などの仕事をじっと見つけているのが好きな子供だったから、左官屋が鍬で土を返しているのをその音とともに楽しんでいたことがあるが、悪臭を嗅いだ覚えがない。これは多分、素材が違うものであったのであろう。

土本来の性質に任せておけば、固まってしまう。固まるならそれでいいではないかと思ってしまう。勝手に固まった壁ではびび割れが出来てしまうらし

い。固まろうとする性質を、一度腐ら
せて、殺して「癖抜き」するのだとい
う。こうして仕上がった土は、さらさ
らで色も淡くなっている。固まる癖を
一度抜かれた土だから、実際に使う時
は「つなぎ」が必要なのだ。

もう二十年近く前になるが、シルク
ロードを旅した時に、敦煌の西約八十
キロに遺された古代からの関所跡であ
る玉門関の烽火台に立つたことがあつ
た。高さ十メートルもある、何層にも
土を塗り固めたような烽火台は、敵襲
などを狼煙でいち早く次の烽火台に伝
えるためにあつたのだそうだが、ほく
らが行った当時は、烽火台の中まで勝
手に入つて崩れた内部まで覗けるよう
になつていて、奥に「つなぎ」が入つ
ていたのに驚いた覚えがある。結構長
い葦や柳のような木の枝などがあつた。
それは日本の壁土に使われる小さく刻
んだ「つなぎ」とは違って、そのまま、
という感じで素材がすぐに分かつた。
大昔の葦や柳が腐りもせず、今ここに
存在していると思うと不思議な感懐が

走つた。

土も荒つぽいざらざらした感じで、
日本の外壁とは印象がまるで違う。そ
れだけ頑丈に出来ていたのかもしれない。
なにせ過酷な地だ。周囲は延々と
砂漠であつたが、割りと近くには大河
があつたという話もあつたから、土も、
葦や柳も豊富だつたのだろう。

「和」の、繊細な土壁とは、そのあ
たりがちよつと違うのだ。作家は、続
いて書く。

「こうきいてくると、死なす殺すとい
う激しい言葉が、無理もないものだ
ということがよくわかる。本来の性質を
もつたままの土を、生きている土と考
える考え方もおもしろいし、本来の性
質を抜いてしまう操作を、こらす死な
す、という言葉で表現するのもおもし
ろい」

その上で作家は、こう述べる。
「持つて生れたのがいい性質ばかりな
ら、持つて生れたのではない。だが、自他とも
にいためる嫌な性質を、誰でも、多少
はいわず、かならず持つて生れている

のである。その性質を捨てなければ、
という忠告は誰でもが身におぼえが
あろう」

あるある。多少ではなくて多々ある。
ありすぎる。ほく自身を振り返る時、
ぐざりぐざりと作家の言葉が刺さつて
くる。

幸田文の父は、ご存じ「五重塔」で
有名な幸田露伴。文の娘の青木玉さん、
孫の青木奈緒さんも作家という凄
筋の一家だ。文は、露伴の没後に書い
た追悼文で注目され、作家になつた
という変わり種。「黒い裾」で読売文学賞
を受賞している。亡くなって二十年
が過ぎたが、彼女のエッセイなどには
今でも人気がある。文の文章は、露伴
の追悼文の時からスパッと鈍で切つた
ような文章と言われていたが、どの作
品も感の鋭いものばかりだ。うじうじ
としている者にとつては、激励され、
後ろから背中を押してもらつたよう
な気になる作品だから、人気はいつ
までも衰えない。

コーヒーマは俳句を呼ぶのか



片岡 義男

(作家)

冬の始まりを感じさせる気温の低い日だった。平日の午後、五時前の街は、すでにさまざまに明かりの灯る夜だった。しかし夕食にはまだ早く、僕たち四人は路地のなかの喫茶店に入り、その片隅にそれなりの居心地の良さを見つけ、コーヒーマのひとつとなった。僕、そして僕より十歳年下の男性、さらに十歳下の、おなじく男性、そしてもう一度さらに十歳だけ年下の、僕たちは妙齢と言っている女性。僕たち四人とは、このような四人だった。埒もない話がゆるくつながっていく

うちに、話題はなぜか俳句になった。冬の夕方のコーヒーマ、そして場所は喫茶店の片隅、という条件が揃えば、人の心は俳句に向かうのだろうか。作家はどんな俳句を詠むのですか、と妙齢の女性が僕に訊いた。おなじような状況をつい昨年の冬の始めにも体験したことを、僕は思い出した。僕は俳句を披露し、同席していた人たちもそれぞれいくつかの句を詠んだ。そしてそのときのことを題材にして、僕は新聞にエッセイを書いた。

今回も、体験したばかりのおなじよ

うな状況を材料にして、僕はいまこうしてエッセイを書いている。僕の俳句として本人が好んでいる唯一のものは、「遠雷や バス待つ女 赤い靴」という句だ。これは俳句の基本ルールのひとつである、遠景から近景へ、という法則に則っている。遠くに聞こえた雷の音が、遠景だ。そしてそこからバス停留所にひとり立っている女性へ、つまり中景へとズームし、そこからさらに、彼女の履いている赤い靴という、近景へとズームしている。視覚だけで作った俳句だ、したがってそこに託さ

れた思いはなにもない。

これはずいぶん昔に作った句だから、なにか新しいものを披露しなくてはいけない。とつさに作った三句は以下のとおりだ。「紅しまう 女の指に 真冬あり」「毛糸編む つらい横顔 ドートルで」「収支なら ほのかにピンクか 娑婆遊び」さすがですねえ、と同席の三人は感心したが、凡句の山なら誰にでも築くことが出来る、と思っただければ、それで充分だ。

三句とも説明の要はないと思う。真冬のある日あるとき彼女は口紅を化粧パウチに戻した、という点景。おそらく自己治療として必死に毛糸を編む女性がつらそうな横顔でドートルの片隅にいる。つらい横顔、という部分は僕の主観ではなく、彼女は事実そのとおりだった。そして三句目は、人生を振り返ればかすかに赤字かな、という心境だ。

口紅をしまう女の指先にあるのは、真冬ではなくて真夏でもいいでしょうね、と十歳年下の男性が言った。四季

のどれでもいい。彼は一句詠んだ。「コーヒーの ひとときがある 冬西陽」一杯のコーヒーと十七文字の結びつきの可能性は、かなりのところまで大きいのではないかと僕は思う。

冬の季語としてはきわめて平凡な大根で、それぞれに詠んでみようか、ということになった。しばしの黙考ののち、僕と二十歳違いの男性が、「大根を 洗う娘の 爪黒く」という句を詠んだ。身近な体験かしら、と妙齢が言った。ほら、あそここの席に、爪を黒く塗った女性がいます。じゃないですか、彼女が大根を洗うのです、と彼は答えた。普通なら爪は赤く、したがって凡句の典型なのだが、爪が黒いと趣は明らかに異質なものとなる。

「大根を 袋に下げて 家路なり」これは十歳年下の男性の句だ。家路なり、という部分がなんとも言いがたく凡句の様相を呈している。しかしはつきりそうとも言えないから、大根を袋に下げるまでいい、問題はそこから先の五文字だ、と僕は評した。

妙齢の彼女は長考を要した。コーヒーのお代わりをしたほどだ。そしてまず出来たのは、「母老いて 沢庵 昔のままなれば」という句だった。実家に帰れば母は老いているけれど沢庵は昔のままの味と香りそして歯ごたえである、という感慨だ。沢庵が昔のままであるのはたいそう良いとして、母老いて、という最初の五文字はいかにも平凡だ。

意地を見せた彼女は、自作を添削した結果を見せてくれた。

「母がいて 沢庵 昔のままなれば」という結果だった。ここでも沢庵は昔のままだ。それはそれでいいとして、母がいて、という部分はまだ弱い。どこがどう弱いのですか、と彼女は言う。母をその場にもっと強く居つかせなくてはいけない、と僕は答えた。しばらく考えた僕は、なんとか代案を示すことが出来た。

「母のいる家沢庵に 変わりなく どうか、僕にはなんとも言えない。」

いま食べたいものベスト・10



新田啓造

(ジャーナリスト)

「美味しいものを食べたい」という願望は病人になると更に激しくなるものらしい。時には、この美味しいものを食べたら死んでもいいと思ったりするから始末が悪い。挙句の果てに入院中にいま食べたいものベスト・10を帳面に書き出したりする。最後の晩餐ではないが、それに似た心境であろうか。

これは昨年暮から今年にかけて、腸閉塞に三回なり、点滴生活が四十日も及んだ時のものだ。いま食べたいものベスト・10を選んでみた。

一位はスキヤキ。といっても牛肉の鍋ではない。馬肉、つまりサクラ鍋な

のだ。子供の頃、育った信州では、よく馬肉を食べた。馬サシ、サクラ鍋は定番だった。その味が忘れられない。また食べたいというわけだ。

二位は、海鮮丼。ウニがたっぷり乗ったそれだ。ウニだけのウニ丼でもいい。これには強烈な思い出がある。

北海道、松前の鄙びた漁港を旅したときのことだ。とある居酒屋にぶらり入って、常温酒をちびりちびりやりながら、「ウニをください」というと、しばらくして、丼に一杯のウニが出された。これにはビックリ。いくら田舎とはいえ、これだけのウニは高いだろう

な、と震えた。ところが勘定の段になって二度ビックリ。あまりの安さに驚いてしまった。ウニには、そんな縁もあつてか離れがたいものがある。焼きウニも食べたい。

三位は干し柿。天然の甘みとあのグチャつとした感触は、何故か食べたくなる。旨さの固まりのような気さえする。古い話になるが、おふくろの作った干し柿は、一段と美味しかった。

四位は、カレー・ライス。ライスカレーと呼んだほうが正しいかもしれない。肉なしカレーである。ルーは小麦粉をサラダオイルで炒めカレー粉をまぜ固めたもの。これが昭和二十年代のカレーの基本であった。玉ネギをよーく炒め、ジャガイモ、ニンジンを炒めてから、じっくり煮る。実に懐かしい味である。子供の頃、誕生日の祝いとか、友だちが遊びに来たときなど、よく母親がつくってくれたものだ。

後年、ナスやキューリ、ピーマンなどを入れたカレーや、ココナツツ・カレーも好きだったが、いま食べたいと

なると懐かしのカレーに勝てるものではない。

五位は、ホロ吹き大根。これは味噌次第だが、あっさりした中にもコクがあつて旨い。大根の旨い季節でないといけないことは言うまでもない。

六位は牡蠣(かき)。これは、どうやっても美味しい。生で食べるもよしソテーで食べるのもいい。カキ・グラタンもいいし、変わったところではギョーザに入れても旨い。パリで食べた生ガキも忘れられない。

七位は、鉄火ナス。甘味噌に七味をちよつと加え、炒めたナスと混ぜ合わせただけのものだが、これがあれば、ご飯の一、二杯は軽くいける。ナスはもともと大好きなので、焼いても煮ても蒸しても、どうやってもいける。

八位はグラタンである。乳製品は決して嫌いではない。むしろ、好きである。あの表面のパン粉、バターとチーズが焼けた香ばしさは堪らない。

普通は長円形のグラタン皿を用いるが、ホタテ貝の殻に盛つたのをコキ-

ルといい、同じはずのものが、ひと味違うような気がしないでもない。

九位は、チラシ寿司。実はこれもカレー・ライスと並んで懐かしい味の筆頭である。子供の頃、母親が折に触れチラシをつくってくれた。

チラシ寿司といつても海鮮はほとんど入っていないシロモノだった。シヤケ缶を甘辛く炒め、そばろをつくつてシイタケ、ニンジン、ゴボウ、チクワ、油揚げを甘辛く煮、ご飯と混ぜ合わせる。その上にシヤケのそばろと金糸卵を乗せ、更に紅生姜(シヨウガ)をチラつかせる。魚っ気は缶詰のシヤケだけ。海のない県のチラシ寿司である。

十位は、ネギスタ。ネギを茹でて酢味噌と和芥子(わがらし)をかけるだけ。普通はマグロの赤身や長イモのすりおろしなどを加えるがすべて省略。ネギが柔らかくなる冬場には、欠かせない味だ。

こうしてベスト・10を選んでみるとちよつとぴり恥ずかしい気がする。見てみると世界の三大珍味、フォアグラ、

キャビア、トリフが入っていない、更に、王者フグも入っていない。

うなぎ、スッポンの名もない。きんぴらごぼう、里イモの田楽、肉ジャガ、ゴマ豆腐などが、ベスト・10に続く料理。旨いといわれるものも食べてきたつもりだが、食べたいものとなると別なものを選んでしまう。

食というものは不思議なもので、一人で食べるより二人、三人、五、六人が丁度いいところか、大勢で食べたほうが旨い。とくにこれから冬場にかけての鍋など、大勢で食べると盛り上がる。かくいう私、実はいま抗がん剤を射つこと七ヶ月、副作用もちよつと厳しくなりつつあります。その一つが口内炎。これには参りました。

味がよく判らないのです。全体に何を食べてもざらざらした感じで、旨いまずいの判断どころか、食欲さえもおとろえてしまう始末。

情けない話で、旨いもの、食べたいものを食べてもわからない有様。せめて、旨いまずいの判定をしたい。

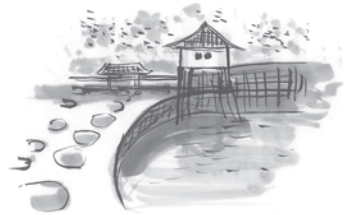
雪の桜田門

桜田門

桃の節句

春の雪

右のように文字を並べただけでも、すぐ連想されるのは「桜田門外の変」だが、私もある歴史雑誌に、この事変を書く機会があった。ただ原稿依頼のあったのが、例年に無い猛暑の最中だったために、雪中決闘のシーンの描写にはえらく苦労した。なにしろ三十六度の猛暑だ、まったく雪のイメージが湧かないのである。で、雪の字に涼を覚える残暑かななどという駄句をひねって苦笑したも



のであった。

事変は安政七年（一八六〇）三月三日（半月後ろ延に改元）に起きた。この日は上巳の節句、すなわち桃の節句であり、江戸城の大礼日とされ、在府の諸大名が総登城して、將軍に賀詞をのべるのが慣わしとされていた。

諸候の登城は、城中で打ち鳴らされる五ツ（午前八時）の太鼓の音を合図に始まるが、そこを大老井伊直弼は狙われたのだ。然し、この事変は、まったく予兆なしに発生したわけではなく、すでに水戸藩当局から、脱藩浪士が江戸潜入を企てているから御注意なされ

永岡 慶之助
(作家)

たとしと届け出があり、関八門取締役や江戸町奉行所でも、厳しい探索や宿敵めをやっていたのである。

現に、大老井伊直弼自身、去年正月、懇意の大名から「はなはだ御身が危険である。一時、大老職を辞されてはどうだ」と忠告されていたのだ。直弼にすれば、不逞のやからに怯えて、大老を辞職するなどは、幕軍の先鋒たりし「井伊の赤備え」の誇りが許さないだろうが、家老などの重臣らももっと厳しく警戒すべきではなかったか。

一方、厳重な警戒網を潜って江戸市中に紛れ込んだ水戸脱藩浪士は、薩摩

藩士有村次左衛門一人を含めて十八名。現場指揮者の関鉄之今は、元郡奉行与力で三十六歳。智力も氣力も衆にすぐれた男盛りであった。彼は商人吉野屋惣助と変名、傘をさして、さりげなく同志の動きに眼を配っていた。さしずめ大石内藏助の役どころで、実は彼等自身、かなり赤穂浪士を意識していたようであり、吉良邸討入りならぬ井伊邸への討入りも、企てたこともあるのである。ともあれ、水戸浪士は井伊家の行列の来るのを、見物人に紛れてじつと待ちうけた。

彦根藩井伊家上屋敷から、江戸城桜田門までおよそ五五〇メートル。この距離の近さが井伊家の油断となったワシもあるが、とにかく六十余名の行列が桜田門へ向った。その行列が突如乱れたのは、訴状のようなものを掲げた浪士の一人が駆け込んだからだ。が、「狼藉者！」の上がった途端、駕籠側の者共までが前方へ走りだしたため、「何事ぞ？」と直弼が駕籠の戸を開けた途端、浪士の短銃が火を吹き、それを合図に

浪士が一斉に斬り込み、たちまち、そこかしこで乱闘が開始された。

そのとき井伊家の従者の多くが右往左往する中であつて、ただ独り、素早く応戦の支度をとつた人物がいた。

御供目付河西忠左衛門である。彦根藩切つての劍客である彼は、先頭の「狼藉者！」の声を聞かや、さつと駕籠側に寄り、片膝ついて合羽を脱ぎ、刀の柄袋をはずし、刀の下緒で襷掛けとなるや、「よしっ」と気合をかけて両刀を握った。

そう忠左衛門が両刀をかざし、鋭い気合を發して動くたびに、襲撃者の中から深手浅手を負う者が続出した。が、さしもの忠左衛門も、一斉に殺到した白刃には、身の躲しようもなく、白雪を鮮血で染めて崩れ落ちた。そして路上に孤立した駕籠の左右から、薩摩浪士有村次左衛門と、水戸浪士広岡子之次郎が白刃を突き入れ、大老井伊直弼は首を掻きとられた。

ところで、これほどの惨劇なのに、冒頭に書いたように、「桜田門」「桃の

節句」「春の雪」の文字と並べると、なんとなく日本的にやわらいだ。一種ロマンチズム溢れる情景に変質してしまふ感があるのは、一体どうしたことであろうか。「忠臣蔵」の吉良邸討入りの場合もそうだが、乾いた西欧の復讐劇と異なり、日本のそれは、ひどく情緒的なのである。「桜」「桃」「雪」という日本語の秘める魔力なのであるか。

その点について、痛切に考えさせたのは、パリ、アンバリットの軍事博物館を見学した際だ。ここには歴代王者用の甲冑群が陳列されているが、奥のオリエンタルルームには、日本武将の鎧、兜着用の騎馬像があり、その緋緞の鎧を見た瞬間、私は西欧との違いを明確に悟った。仏歴代王の甲冑がロボットのなのに対し、日本武将の緋緞の鎧は、哀しいまで繊細で華麗なのだ。ふと気づいたら、いつしか私は「桜・桃・雪」の国日本人について、思いを巡らしていた。